

謎に包まれた諜報機関「陸軍中野学校」の紛れもない、本格的な歴史書の出現である。「中野」といえば、ルパン島から生還した小野田寛郎元少尉の帝国軍人そのものといった直立不動の姿勢と、端正な風貌を思い出す。そんな虚実とりませたイメージの予断を排し、たった七年間の歴史を闇の中から発掘している。

中野学校は同時代には存在そのものが秘匿されていた。隣の敷地にあった憲兵学校出身者もその存在に気づかなかった。講義内容を教科書は返却する必要があった。徹底した秘密主義である。学生たちは髪を伸ばし、背広とネクタイを支給された。全陸軍から選抜され、『透明人間』として生きねばならない。勳章もなく、靖国に祀られることも望めないエリート集団であった。

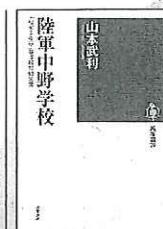
中野の教育方針は戦局などで更を余儀なくされるが、根本的には、単独行動に耐えうる知性と判断力の育成だったといつてい。命令一下、死ぬことを義務づけられた軍人たちとは正反対である。自由な議論が歓迎され、降伏か玉砕かを論じ、天皇制の是非までフリートーキングだった。その

## 天皇制の是非まで許される自由な議論が歓迎された空間

一方で、「国体学」が重視されていた。特殊な教育空間から二千数百人が巣立っていった。敗戦とともに書類は焼却され、卒業生たちの記憶は密封された。著者の山本武利はインテリジェンス研究の第一人者である。国内外の史料を探し出し、生存者に取材し、無名者たちの辛酸の歴史を復元している。

「中野」に一番注目したのがソ連であり、アメリカは占領一年後に学校の存在に遅ればせながら気づく。皮肉な話である。それ以上に皮肉なのは、昭和天皇の「御言葉」が「中野」の自由な言論を委縮させたことだった。著者は『昭和天皇実録』の小さな記事を手がかりに、その皮肉に接近していく。そこからは上下ともどもの、アジアを軽視した帝国日本像が炙り出されていく。

田丸雅智は東大工学部卒で、ショートショートの旗手として活躍する新鋭。理系の目で俳句を分解再構築し、ショートショートに仕上げた。たとえば、「花占ひのやうにふぐ刺し食ひにけり」という句。花



**陸軍中野学校**  
「秘密工作員」養成機関の実像  
**山本武利 著**  
筑摩書房 1700円+税  
装丁／神田昇和

## 平山周吉

## 嵐山光二郎



**俳句でつくる小説工房**  
**堀本裕樹 田丸雅智 著**  
双葉社 1400円+税  
装丁／鈴木徹(THROB)  
絵画／高橋由季

## 読者の詠んだ俳句を分解再構築してショートショートに

泣けるのは、「この日の日浅い水辺を海にして」という句から生まれた「都会のビーチ」。はたして「水辺の海」とはなにか。「逝きし友の家族と賀状続きたる」の句から生まれた「写真の友」には心靈写真家が登場する。堀本裕樹の選評「親友が亡くなつたからといって、その周りの縁が切れてしまつわけではない。むしろ深まることがあるだろう」という言葉が深く胸に刺さり、それを体現する使命に駆られて、ショートショートが仕上つた。堀本(俳句) × 田丸(ショートショート)によるエキサイティングマッチ。俳句と小説の格闘